

## 第22回 風に関するシンポジウム

期 日：1975年11月12日（水）9：00～17：10

会 場：農林省農業技術研究所講堂

東京都北区西ヶ原 2-1-7 電話 03-915-0161

京浜東北線上中里駅下車徒歩約5分（改札口を出てから右方向に坂道（車道）を登り、交通信号のある交差点を右折、約50m先（右側）にある。

共催学会：地震学会，土木学会，日本海洋学会，日本気象学会，日本建築学会，日本航空宇宙学会，日本地理学会，日本農業気象学会（幹事），日本林学会

### プログラム：

9：00～10：35

(1) 耕地（狭い）の炭酸ガス環境と光合成に対する横方向拡散の影響 井上君夫（農技研気象）

(2) 送風防霜法の効果に関する考察

上村賢治（東大農）

(3) 林のまわりの風

藤博之助\*，佐藤浩（東大宇宙航空研）

(4) 風観測と地形 塩谷正雄\*（日大生産工），  
西野新造（本四連絡橋公団）

(5) 海岸付近の風

内清秀\*，木村富士男（気象研応用気象）

(6) 若狭新庄地区における南風について

光田寧（京大防災研）

(7) 東北地方の地上風系

河村武（気象研応用気象）

10：35～10：45 休憩

10：45～12：15

(8) アドリア海岸のボラ地域の 大気候および小気候条件について 吉野正敏（筑波大地球科学系）

(9) フェーンとボラの定義について

吉野正敏（筑波大地球科学系）

(10) 斜面上の風の特性について

藤谷徳之助\*，花房龍男，相馬清二（気象研物理気象）

(11) 山のうしろに放出される渦の風洞実験

恩田善雄\*，佐藤浩（東大宇宙航空研）

(12) 温度分布をもつ大気境界層の風洞実験

田中航二\*，佐藤浩（東大宇宙航空研）

(13) 超音波温度計と熱電対の組合せによる湿度変動

の測定

竹田厚（東大海洋研）

(14) 落下物の着地点に対する風の統計的効果について 岩田勉\*，土屋清（宇宙開発事業団）

12：15～13：00 昼食

13：00～15：25

(15) 風の乱れの空間スペクトルについて

岩谷祥美（日大生産工）

(16) 乱流輸送量の変動スペクトル

井上栄一\*，真木太一（農技研気象）

(17) 角柱風上面に加わる変動風圧力の性質について 石崎潑雄，河井宏允\*（京大防災研）

(18) 高層建築物の側壁面に生じる変動風圧

上田宏（日大生産工）

(19) 高層建物の周辺気流の風洞実験結果について

石崎潑雄，吉川祐三\*（京大防災研）

(20) 建物周辺に生じる強風領域の測定の高さによる相違について 丸田栄蔵（日大生産工）

(21) 建築物周辺の風について

塩谷正雄，岩谷祥美\*（日大生産工）

(22) 建物周辺の風について

室田達郎（建築研第三）

(23) 市街地低層部における風の観測

勝田高司，村上周三，上原清\*（東大生産技研）

(24) 建物周辺気流に関する風洞実験の測定器，模型寸法，及び再現性について

勝田高司，村上周三，上原清\*（東大生産技研）

(25) 建物周辺に発生する強風ならびに，防風垣による強風の遮蔽に関する風洞実験

勝田高司，村上周三（東大生産技研），

池田耕一（国立公衆衛生院），

上原清（東大生産技研）

15：25～15：35 休憩

15：35～16：30

(26) 東急建設技術研究所の風洞について

三上力\*，新堀善則（東急建設技研）

(27) 清水建設研究所の風洞について

藤井邦雄（清水建設研）

(28) 日大生産工学部研究所の風洞について

亀井勇 (日大生産工)

(29) 鹿島建設技術研究所の風洞について

本郷剛 (鹿島建設技研)

16:30~17:10 特別講演

(30) 環境風洞について

坂上治郎 (お茶の水女子大理)

佐藤浩 (東大宇宙航空研)

(\* 印は講演予定者)

一般講演時間: 13分 (質問時間含)

懇親会: 時間, 17:15~19:00. 会場, 農技研地下食堂. 会費, 1,500円. 申込方法, 〒114 東京都北区西ヶ原 2-1 農技研気象科 真木太一宛お申込み下さい (11月10日).

## 海外だより

### 外国の気象観測所めぐり (3)

Service national de la météorologie du Laos

—102°40'E, 18°N, Vientiane—

1972年12月10日, バンコックを飛びたった40人乗りのプロペラ機はタイの平原を北北東へ1時間あまりでメコン川を越えてラオスの首都ビエンチャンへふわりと着陸した。両替所もない飛行場にとまどいながらタクシーでホテルへ行き大型できたない紙幣をドルと交換に受けとる。この国にはコインはない。翌日気象台を探したら飛行場の向いにメコン川を背にして近代的な美しいビルが見つかった。手前の美しい露場のまわりの草原には鹿と羊のあいのこのような可愛い動物が放たれている。この国の家はタイとちがって古めかしく、いかにも古都という感じがする。気象台の幹部は、フランス・オーストラリア・ソ連などの大学を出ており、気象業務のほか、国家の重要な指導階級として、また国軍の幹部として、毎土曜日には軍事教練にもはげんでいる。気象器械は各国から提供されたものがコンクールのように並んでいる。中でもヘルシンキ製というラジオゾンデ追跡装置は、メコン川の岸に60m四方に数十のアンテナがごばん目に並んでいて珍しかった。

次の日、気象台のジープで北方70kmのメコン川の支

流の Nam Ngum 川にある日本工営のつくったダムを見学に行った。ラオスは日本の倍の面積にたった200万人で、全消費電力は当時でたった9,000kWということ。このダムはすでにその3倍の発電をタイへ電気を輸出しているのだそうだ。メコン川に沿っていくつかの水位雨量観測所がおかれており、そのデータはバンコックのIBMセンターで解析され、洪水予報がラオスの住民に放送される。洪水が来ると住民は一階が柱だけの2階建の家にもって水がひくのを待つ。ジープはこのような竹馬に乗ったような家が点在する中を真赤な土煙をあげてはしる。いたるところに検問所があり、聞けば、このあたりでも毎日数人の戦死者があるという。途中で農業気象観測所があり、風、雨、気温、地温、湿度などが測られていた。このあたりは両方の勢力のいりまじっているところで、のんびりした風景の中に緊迫感がある。ラオスの人たちは酒が強く、話に熱中する人が多いが、政治の話になると口が重い。ここに来て、日本は平和でありがたいとつくづく感じた。

(京大防災研 中島暢太郎)